

木洩れ陽が射す森の中。小鳥が樹木の上で、チチチチ、と鳴いた。風で木が揺れる。まだ、手つかずの温もりが残されている長沼の緑を、一歩一歩、かみしめるように歩を進める。

道のかたわらに咲いているのは、たくさんのカタクリの花。そして、何という名前の花だろう。ただ可憐に、手つかずの自然の中だからこそ咲くことのできる、繊細な花々がそこにあつた。花の名前など、どうでもよい。今はただ、ここに咲くものたちの美しさを感じていたい。痛切にそう思った。

花を踏まずに、歩いてゆく……。春たけなわを迎えてもなお、雪がとり残された沢を、サクサクツ、という音を立てながら登る。そして、森を呼吸する。ふと目をとじると、サワサワ、という音、頬をなでる風の触覚や匂いが、ことさらに感じられる。

森は、優しいだけではない。ときおり険しい表情も見せる。さらに沢を登ろうとする時は、より厳しい、道なき道を選ばなければならぬ。しかし、その険しさを乗り越えた者だけが、下界にはない自然の神秘にふれることができる。急勾配の林を抜けたとき、一人の人間も自然の一部なのだ、という当たり前の事実を、改めて想い起こした。

どのくらい登ったのだろう、日射しをささげる樹木が途絶え、別天地が目の前に広がった。柔らかな陽につつまれ、優しげに咲いているわさびの花々……。清らかな水のかたわらにしか生育できない繊細な植物が、ここに安息の場を見つけ、身を寄せ合うように群生している。持ち帰って、家の食卓に……そう



**森の懐かしい
記憶に抱かれて。**